



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オープンソースとしてのNP0活動の発展過程と促進要因に関する研究
Author(s)	敷田, 麻実; 森重, 昌之
Description	日本NP0学会第7回年次大会. 平成17年3月20日～平成17年3月21日. 西宮市
Relation	日本NP0学会第7回年次大会報告概要集. pp.113-115
Issue Date	2005-03-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34799
Type	conference paper
File Information	1395.pdf



■オープンソースとしての NPO 活動の発展過程と促進要因に関する研究

敷田 麻実 (金沢工業大学)

森重 昌之 (計画情報研究所)

1. はじめに (目的と背景)

NPO 活動では、マネジメントに関する蓄積のある営利企業に比べ、その組織やしぐみをどのように進化させるかについての方法論が十分とは言えない。また非営利であることで組織やしぐみの評価が軽視され、その運営が非効率になる恐れは大きい。そのため運営を効率的、効果的にモニタリングしながら、NPO 活動をマネジメントすることが重要である。

そこで本研究では、組織内外の多様な関係者(以下、「アクター」という)に運営のしぐみやルールを公開し、参加と協働でマネジメントを進める「オープンソース」としての NPO 活動の事例研究から、活動への参加と自律性に関して分析したうえで、サーキットモデルをもとにその活動の促進要因を考察した。その際にアクター間のネットワークを促進するインターメディアリーと、自らの NPO 活動をわかりやすく外部のアクターに伝えるインタープリターの役割に注目して、モデルを構築した。

2. オープンソースと NPO 活動

「オープンソース」とは、Linux などの普及で注目されているが、ソースコード(ソフトウェアの構成情報)を公開し、誰もが開発に参加できるようにしたソフトウェアの総称である。その手法はオープンソーシング、場合によってはオープン戦略と呼ばれている¹⁾。もちろん Linux では、創始者の Linus Torvalds の際だった存在はあるが、彼は Linux の原型の提案と更新モジュールの採否の決定という役割しか担当しておらず、開発には誰もが自由に参加や脱退できる。

本研究では、こうしたソフトウェア作成の分野に限らず、参加者に手法やプロセスを公開し、自由に参加できる手法をオープンソースとした。従ってオープンソース型 NPO 活動とは、マネジメントのしぐみやプロセスを公開したうえで、個人や団体を含むアクターが主体的に参加し、ルール(規範)やツール(しぐみやプロセス)を創出する手法とした。

このようなオープンソース型 NPO 活動は、①人材や情報に恵まれず、マネジメントの経験も乏しいことが多い NPO では、アクターの持つ知識を積極的に活用できる、②地域特有の問題解決には「ローカルな知識」や「利用者が持つ知識」の活用が必要となる、③不確実性が高く、科学的知識だけで解決できない問題が多い、④地域特性に過度に配慮した「偏狭な地元主義」に陥ることを防止できる、⑤NPO の運営に関わるアクター自身が知識を創出する学習機会が多くなる、などの点で有利と考えられる。

本研究では実際の NPO 活動について、聞き取り調査と参与観察から「参加スタイル」と「活動の自律性」の関係を分析・整理した。その結果 NPO 活動にも、運営側がしぐみを決定し(他律的活動)、参加者を単に参加させる状態(受動的参加)から、参加者が積極的に参加し(主体的参加)、自発的にしぐみを形成する(自律的活動)オープンソース型 NPO 活動まで、さまざまなタイプが存在することを示した。しかし実際には、オープンソース型 NPO 活動が最終形で、そこに向

かつて「進化」するのではなく、環境や社会的条件によって、参加度と自律性の異なる活動を組み合わせた NPO 活動を進めるべきと考えられる。

3. サーキットモデルによるオープンソース型 NPO 活動

次に、NPO 活動の発展の促進要因に関して、サーキットモデルをもとに分析した。このモデルは知識創造に注目し、外部からの参加を許容しながら NPO 活動を発展させるプロセスを説明しており、地域経営²⁾や学習³⁾でも応用可能であることが報告されている。またこのモデルは、誰もが自由に参加できるオープンソース型のプロセスを基本としている。しかしサーキットモデルに関する先行研究では、サーキットモデルを回転させ、NPO 活動を充実させる「促進メカニズム」にまでは言及されていなかった。そこでサーキットモデルを用いて、オープンソース型 NPO 活動を促進するためのポイントを整理した。

サーキットモデルでは、組織内部で知識が自由に発信され、その知識がネットワークされると設定されている。しかし知識や情報を「オープンにした」からと言って、必ずしも問題解決の行動につながるわけではない。つまり、知識が発信されれば自動的にネットワークや協働が形成されるのではなく、それを促進する役割や機能が必要と考えられる。

そこで「インターメディアリー」と呼ばれるアクター同士のつなぎ役、仲介者の存在が考えられる。それはリーダーではなく、「結びつけ」や「関係の活性化」を担ういわば「マネージャー」であり、組織の境界を越えてコミュニケーションできる「コスモポリイト」に相当する。インターメディアリーはアクター間の「関係性」を活性化したり、強化したりすることで、NPO 活動の成果に結びつけている。ただし、ここでのインターメディアリーが持つ役割は、通常 NPO 活動で言われている中間支援活動とは異なり、アクター間のネットワークをつくり出す存在として想定している。

一方、NPO 活動を通じてつくられた成果が組織外部に発信されても、外部のアクターにはその意味が理解しにくいことが多い。そこで、成果の持つコンセプトをわかりやすく説明する必要がある。その役割を果たすのが「インタープリター」である。インタープリターは発信された成果を翻訳して外部のアクターにわかりやすく伝えることで、アクターが成果に含まれているコンセプトを評価するためのサポートをする。NPO 活動では、その活動の理念の高さから、ともすれば外部が理解していなくても活動を続けるという、いわば内向きな活動が起こりかねない。しかし、それでは活動を更新し、常に新たなアイデアや人材を得ることはできない。そのためにもインタープリターの持つ役割は重視されなければならないだろう。

以上のように、オープンソース型 NPO 活動にサーキットモデルを応用して分析した場合、インターメディアリーとインタープリターの存在が、NPO 活動を促進すると考えられる。そのため、こうした役割を持つ存在を意図的に活動の中でつくり出すことが必要となろう。今後はこうしたケーススタディの充実を試みたい。

参考文献：

- 1) 川崎和哉編(1999)『オープンソースワールド』翔泳社、398p

- 2) 敷田麻実・森重昌之(2003)「公共事業の戦略的活用と地域の環境保全ー北海道黒松内町における持続可能な地域振興と政策プロセスの検証」環境経済・政策学会編『公共事業と環境保全(環境経済・政策学会年報第8号)』東洋経済新報社、pp.121-138
- 3) 敷田麻実(2004)「創成教育における新しい学習モデルの提案ーサーキットモデルによるプロジェクトマネジメントとその評価方法ー」(『平成16年度工学・工業教育研究講演会論文集』)、pp.653-654